

# 「盲腸」に新たな治療法

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

「盲腸」として知られる虫

垂炎。子どもの場合、虫垂炎から腹膜炎を起こして重症化するケースが多い。従来は緊急手術を行ってきたが、手術後の合併症を減らすため、すぐに手術せずに抗生物質で炎症を抑え、3カ月後以降に手術を行う新たな治療法が、県立中央病院で行われている。

虫垂炎は、大腸の入り口にある盲腸の先端に付いている虫垂が炎症を起こす病気。発熱や腹痛、嘔吐で発症し、子どもでは小中学生に多くみられるが、3〜4歳でも起る。子どもは虫垂の壁が薄いた



尾花 和子  
小児外科科長

## 炎症抑えた後、腹腔鏡手術

《 29 》

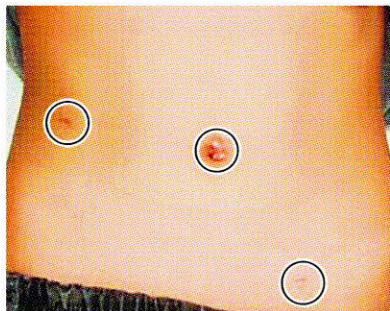
め、放置すると壁に穴が開き、うみがおなかの中に広がる腹膜炎になりやすい。腹膜炎を起すと、下痢や39度以上の高熱が出て、激しい腹痛に襲われる。

小児外科科長の尾花和子医師によると、腹膜炎を起すまでに重症化した虫垂炎は、すぐに手術しても、術後におなかの中にくみが残ったり、傷口が化膿するなどの合併症を起すことが多かった。そこで最近では、まず10日から2週間ほど入院して抗生物質でうみを小さくし、3カ月後以降に腹腔鏡で虫垂を

切除する手術を行う。2回の入院が必要だが、予定に合わせた手術が可能で、従来のように術後にうみを出し切るために、腹部に管を入れる必要がなく、傷口の治りも早いという。

子どもの虫垂炎は進行が早く、半日から1日で腹膜炎を起こしてしまうため、発見と治療は「時間との勝負」（尾花医師）だ。このため、同病院や県内の小児科医は「虫垂炎シート」を作成し、病気を見逃さないよう活用している。同シートは腹部の図が描かれ、腹痛の場所を正確に書き込めるほか、食欲不振や嘔吐などの症状、白血球の数値などを記入できる。

尾花医師は「1次救急と2次救急の医師が患者の情報を共有するのに役立つている。虫垂炎を常に念頭に置くことで早期発見につなげたい」と話している。Ⅱ第2、4木曜日に掲載します



腹腔鏡での手術後、抗生物質を投与後の手術で、傷口は小さくきれいに